

「でんきが築く豊かな未来」、

掛川工業高校 電子電気科 木島 花音

つい先日、静岡新聞を読んでいると『ロボットは「家族の一員」』という見出しをみつけた。その記事によると、ソフトバンクグループの人型ロボット「Pepper（ペッパー）」は東京都内に住む中一女子とのバイオリン演奏の手伝いが日課だという。このペッパーがこの家に届いたのは4ヵ月前頃で、今では中一女子の母親が子供が一人増えた感覚というほど、すっかり家族になじんでいるようだ。まさに、家族の一員がある。

私がこの記事を読んで、びっくりしたことは、すでに普通の一般家庭にロボットが普及しているということだ。もちろん人型ロボットが日々開発されていることは知っていたが、このように早い段階で世の中に出回るとは思っていなかった。そして、もうひとつ驚いたことは、購入する人が意外に多いということだ。記事によると、ペッパーは2015年6

月から月1000台限定で一般販売され、毎回完売の状況が続いているそうだ。興味があり価格を調べてみると、約20万円だ、た。正直、安さに驚いた。未来の象徴というべき人型ロボットが『夢』ではなく現実として私たちの日常に存在する時代が来たのだ。活躍の場を広げているのは、ペッパーばかりではない。ロボットは、介護施設など多くの介護の現場でも広がり始めた。ロボットが介護職員の代わりになるわけではないが、黙り込んでいたお年寄りが話したり笑顔になるだけで意味があるそうだ。認知症のお年寄りとのかみ合わない会話だ。て我慢できる。今年中には、在宅高齢者の見守りロボットも投入され、将来的には、ロボットと関わることで介護予防や認知症の進行を抑制する効果が期待できるといふ。ロボットは、どこまで進化していくのか？興味はつきない。しかし同時に、自分がロボット以上に必要とされる人でありたいと思う。